

'11 後期 理系 ①

提出 年 月 日 名前

$0 \leq \theta < \pi$ に対して, 行列 $\begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix}$ で表される 1 次変換を f とし, 点 P の f による像を $f(P)$ で表す.

- (1) 点 $Q\left(\cos \frac{\theta}{2}, \sin \frac{\theta}{2}\right)$ に対して, $f(Q)$ の座標を求めよ.
- (2) 点 $R\left(\sin \frac{\theta}{2}, -\cos \frac{\theta}{2}\right)$ に対して, $f(R)$ の座標を求めよ.
- (3) f は直線 $y = \left(\tan \frac{\theta}{2}\right)x$ に関する対称移動であることを示せ.

'11 後期 理系 ②

提出 年 月 日 名前

a を実数とする. xyz 空間内の 4 点を $A(0, a, 4)$, $B(-2, 0, 3)$, $C(1, 0, 2)$, $D(0, 2, 3)$ とし, 点 $P(1, 0, 6)$ に光源をおく.

- (1) 光源が xy 平面上につくる点 A の影の座標を求めよ. また, a が実数全体にわたって変化するとき, その影がつくる直線の方程式を求めよ.
- (2) 光源が xy 平面上につくる三角形 BCD の影は三角形となる. この三角形の頂点の座標を求めよ.
- (3) $a < 5$ とする. 光源が xy 平面上につくる四面体 $ABCD$ の影を考える. この影が三角形となるような a の範囲を求めよ.

'11 後期 理系 ③

提出 年 月 日 名前

k を実数とし, $x \geq 0$ に対して $f(x) = xe^{-x}$, $g(x) = kx$ と定める. ただし, $e = 2.7182\dots$ は自然対数の底である.

(1) $0 < x \leq 2$ の範囲に $f(x) = g(x)$ を満たす x がただ 1 つ存在するための k の範囲を求めよ.

(2) k が (1) の範囲にあるとき, (1) で定まる x を a とする. 積分 $\int_0^a f(x) dx$ の値を k を用いて表せ.

(3) k が (1) の範囲にあるとき, 積分 $\int_0^2 |f(x) - g(x)| dx$ の値が最小となる k を求めよ.

'11 後期 理系 ④

提出 年 月 日 名前

p を自然数とする. 数列 $\{x_n\}$ を漸化式

$$x_1 = \cos\left(\frac{2\pi}{p}\right), \quad x_{n+1} = 2(x_n)^2 - 1 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

で定める.

- (1) x_n を求めよ.
- (2) l を自然数とする. $p = 2^l$ および $p = 3 \times 2^l$ のそれぞれの場合について $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n$ を求めよ.
- (3) l を自然数とする. $p = 5 \times 2^l$ のとき, 数列 $\{x_n\}$ は発散することを示せ.

11 後期 理系 ①

$0 \leq \theta < \pi$ に対して、行列 $\begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix}$ で表される 1 次変換を f とし、点 P の f による像を $f(P)$ で表す。

- (1) 点 $Q(\cos \frac{\theta}{2}, \sin \frac{\theta}{2})$ に対して、 $f(Q)$ の座標を求めよ。 (2) 点 $R(\sin \frac{\theta}{2}, -\cos \frac{\theta}{2})$ に対して、 $f(R)$ の座標を求めよ。
 (3) f は直線 $y = (\tan \frac{\theta}{2})x$ に関する対称移動であることを示せ。

$S_\theta = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix}$ とおく。

(1) $\overrightarrow{Of(Q)} = S_\theta \begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta \cos \frac{\theta}{2} + \sin \theta \sin \frac{\theta}{2} \\ \sin \theta \cos \frac{\theta}{2} - \cos \theta \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$ より $f(Q) \left(\cos \frac{\theta}{2}, \sin \frac{\theta}{2} \right)$

(2) $\overrightarrow{Of(R)} = S_\theta \begin{pmatrix} \sin \frac{\theta}{2} \\ -\cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta \sin \frac{\theta}{2} - \sin \theta \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \theta \sin \frac{\theta}{2} + \cos \theta \cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\sin \frac{\theta}{2} \\ \cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$ より $f(R) \left(-\sin \frac{\theta}{2}, \cos \frac{\theta}{2} \right)$

(3) One Point
 直線 $l: y = (\tan \frac{\theta}{2})x$ に関する対称移動を g とする。
 $g \begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$, $g \begin{pmatrix} \sin \frac{\theta}{2} \\ -\cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\sin \frac{\theta}{2} \\ \cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$ であり、
 $\begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} \\ \sin \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} \sin \frac{\theta}{2} \\ -\cos \frac{\theta}{2} \end{pmatrix}$ は 1 次独立なので、(1), (2) より f が g である。
 というのは不完全な解答です。なぜならこれは g を 1 次変換と決めつけているからです。
 f によって xy 平面上の全ての点が l に関して対称移動することを示さなければなりません。

【方針】基底の変更

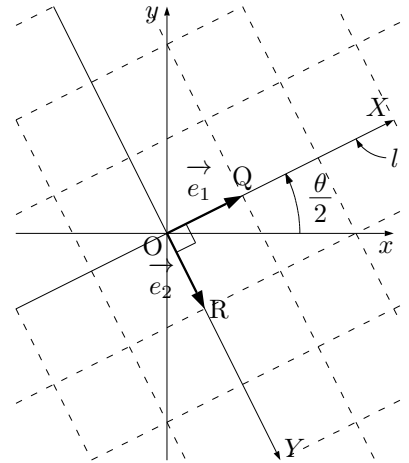
$\overrightarrow{OQ} = \vec{e}_1$, $\overrightarrow{OR} = \vec{e}_2$ とおき、 \vec{e}_1, \vec{e}_2 を基底とする XY 座標平面を考える。

直線 $l: y = (\tan \frac{\theta}{2})x$ は X 軸であり、 $\vec{e}_1 \perp \vec{e}_2$ よりこれは直交座標系なので

(X, Y) を l に関して対称移動した点は $(X, -Y)$ である。

一方、 $f \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} = f(X\vec{e}_1 + Y\vec{e}_2)$
 $= Xf(\vec{e}_1) + Yf(\vec{e}_2)$ (f の線形性より)
 $= X\vec{e}_1 - Y\vec{e}_2$ ((1), (2) より)
 $= \begin{pmatrix} X \\ -Y \end{pmatrix}$

よって f は点 (X, Y) を点 $(X, -Y)$ にうつすので、 f は l に関する対称移動であることが示された。



【別解】(1), (2) を一切利用せずに

$\tan \frac{\theta}{2} = k$ とおくと、 $\begin{cases} \sin \theta = \frac{2 \sin \frac{\theta}{2} \cos \frac{\theta}{2}}{\cos^2 \frac{\theta}{2} + \sin^2 \frac{\theta}{2}} = \frac{2k}{1+k^2} \\ \cos \theta = \frac{\cos^2 \frac{\theta}{2} - \sin^2 \frac{\theta}{2}}{\cos^2 \frac{\theta}{2} + \sin^2 \frac{\theta}{2}} = \frac{1-k^2}{1+k^2} \end{cases}$ より、 $S_\theta = \frac{1}{1+k^2} \begin{pmatrix} 1-k^2 & 2k \\ 2k & -(1-k^2) \end{pmatrix}$ となる。

$A(x, y)$ に対し、 A と $f(A)$ が直線 $l: y = kx$ に関して対称であることを示せばよい。

$\overrightarrow{Af(A)} = \overrightarrow{Of(A)} - \overrightarrow{OA} = S_\theta \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \frac{1}{1+k^2} \begin{pmatrix} (1-k^2)x + 2ky \\ 2kx - (1-k^2)y \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \frac{1}{1+k^2} \begin{pmatrix} -2k^2x + 2ky \\ 2kx - 2y \end{pmatrix}$
 $= \frac{2(kx - y)}{1+k^2} \begin{pmatrix} -k \\ 1 \end{pmatrix} \parallel \begin{pmatrix} -k \\ 1 \end{pmatrix}$ であり、

l は $\begin{pmatrix} 1 \\ k \end{pmatrix}$ を方向ベクトルに持つので、 $l \perp \overrightarrow{Af(A)}$ ($\overrightarrow{Af(A)} = \vec{0}$ も含む)① が成り立つ。

次に 2 点 $A, f(A)$ の中点を M とすると、

$\overrightarrow{OM} = \frac{1}{2} \left(\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} + \frac{1}{1+k^2} \begin{pmatrix} (1-k^2)x + 2ky \\ 2kx - (1-k^2)y \end{pmatrix} \right) = \frac{1}{2(1+k^2)} \begin{pmatrix} 2x + 2ky \\ 2kx + 2k^2y \end{pmatrix} = \frac{1}{1+k^2} \begin{pmatrix} x + ky \\ kx \end{pmatrix} \parallel \begin{pmatrix} 1 \\ k \end{pmatrix}$

よって M は l 上にある②

①, ②より A と $f(A)$ は l に関して対称なので、 f は l に関する対称移動であることが示された。

'11 後期 理系 ②

a を実数とする. xyz 空間内の 4 点を $A(0, a, 4)$, $B(-2, 0, 3)$, $C(1, 0, 2)$, $D(0, 2, 3)$ とし, 点 $P(1, 0, 6)$ に光源をおく.

- (1) 光源が xy 平面上につくる点 A の影の座標を求めよ. また, a が実数全体にわたって変化するとき, その影がつくる直線の方程式を求めよ.
- (2) 光源が xy 平面上につくる三角形 BCD の影は三角形となる. この三角形の頂点の座標を求めよ.
- (3) $a < 5$ とする. 光源が xy 平面上につくる四面体 $ABCD$ の影を考える. この影が三角形となるような a の範囲を求めよ.

A, B, C, D の影を A', B', C', D' とする.

(1) $\vec{AP} = \begin{pmatrix} 1 \\ -a \\ 2 \end{pmatrix}$ より直線 AP のパラメータ表示は $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ a \\ 4 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 1 \\ -a \\ 2 \end{pmatrix}$ ($t \in \mathbb{R}$) となる.

$z = 0 \iff t = -3$ であり, このとき $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 \\ 3a \\ 0 \end{pmatrix}$ となるので $A'(-2, 3a, 0)$

a が全実数範囲を動くときの A' の軌跡の方程式は $x = -2 \wedge z = 0$

(2) $\vec{BP} = \begin{pmatrix} 3 \\ 0 \\ 3 \end{pmatrix} \parallel \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ より直線 BP のパラメータ表示は $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 \\ 0 \\ 3 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ ($t \in \mathbb{R}$) となる.

$z = 0 \iff t = -6$ であり, このとき $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -5 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ となるので $B'(-5, 0, 0)$

$\vec{CP} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 4 \end{pmatrix} \parallel \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ より直線 CP のパラメータ表示は $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ ($t \in \mathbb{R}$) となる.

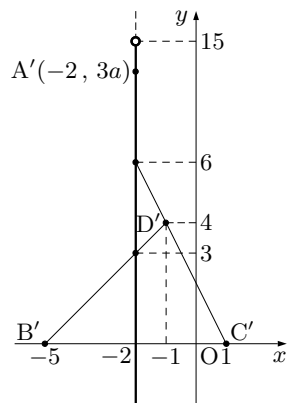
$z = 0 \iff t = -6$ であり, このとき $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ となるので $C'(1, 0, 0)$

$\vec{DP} = \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 3 \end{pmatrix}$ より直線 DP のパラメータ表示は $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 3 \end{pmatrix}$ ($t \in \mathbb{R}$) となる.

$z = 0 \iff t = -2$ であり, このとき $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 4 \\ 0 \end{pmatrix}$ となるので $D'(-1, 4, 0)$

以上より求める座標は $B'(-5, 0, 0), C'(1, 0, 0), D'(-1, 4, 0)$

- (3) 四面体 $ABCD$ の影はこの四面体の 4 面の三角形が作る影を合わせたものである.
 $a < 5$ より A' は右図太線部上を動くので, この影が三角形となるような a の範囲は $0 \leq 3a \leq 3, 6 \leq 3a < 15 \iff 0 \leq a \leq 1, 2 \leq a < 5$.

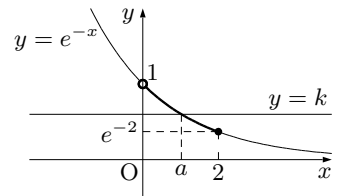


’11 後期 理系 ③

k を実数とし、 $x \geq 0$ に対して $f(x) = xe^{-x}$, $g(x) = kx$ と定める。ただし、 $e = 2.7182 \dots$ は自然対数の底である。

- (1) $0 < x \leq 2$ の範囲に $f(x) = g(x)$ を満たす x がただ 1 つ存在するための k の範囲を求めよ。
 (2) k が (1) の範囲にあるとき、(1) で定まる x を a とする。積分 $\int_0^a f(x) dx$ の値を k を用いて表せ。
 (3) k が (1) の範囲にあるとき、積分 $\int_0^2 |f(x) - g(x)| dx$ の値が最小となる k を求めよ。

- (1) $x > 0$ において、 $f(x) = g(x) \iff xe^{-x} = kx \iff e^{-x} = k$ ($x \neq 0$ より)
 なので
 $0 < x \leq 2$ の範囲に $f(x) = g(x)$ を満たす x がただ 1 つ存在する
 $\iff 0 < x \leq 2$ の範囲に $y = e^{-x}$ と $y = k$ のグラフの交点がただ 1 つ存在する
 $\iff \boxed{e^{-2} \leq k < 1}$



- (2) (1) より $e^{-a} = k \iff a = -\log k$ なので、
 $\int_0^a f(x) dx = \left[-(x+1)e^{-x} \right]_0^a = -(a+1)e^{-a} + 1 = \boxed{(\log k - 1)k + 1}$

$$\begin{aligned} \{-xe^{-x}\}' &= xe^{-x} - e^{-x} \\ +) \{-e^{-x}\}' &= e^{-x} \\ \{-(x+1)e^{-x}\}' &= xe^{-x} \end{aligned}$$

- (3) (1) のグラフより
 $0 \leq x \leq a$ のとき $e^{-x} \geq k \iff f(x) \geq g(x)$ ($x \geq 0$ より)
 $a \leq x \leq 2$ のとき $e^{-x} \leq k \iff f(x) \leq g(x)$ ($x \geq 0$ より)
 よって $h(k) = \int_0^2 |f(x) - g(x)| dx$ とおくと、

$$h(k) = \int_0^a (xe^{-x} - kx) dx + \int_a^2 (-xe^{-x} + kx) dx$$

$$= \left[-(x+1)e^{-x} - \frac{kx^2}{2} \right]_0^a + \left[(x+1)e^{-x} + \frac{kx^2}{2} \right]_a^2$$

$$= -(a+1)e^{-a} + 1 - \frac{ka^2}{2} + 3e^{-2} - (a+1)e^{-a} + 2k - \frac{ka^2}{2}$$

$$= 2(\log k - 1)k - k(\log k)^2 + 1 + 3e^{-2} + 2k$$

$$= -k(\log k)^2 + 2k \log k + 1 + 3e^{-2}$$

$$\begin{aligned} h'(k) &= -(\log k)^2 - 2k(\log k) \cdot \frac{1}{k} + 2 \log k + 2k \cdot \frac{1}{k} \\ &= -(\log k)^2 + 2 \\ &= -(\log k + \sqrt{2})(\log k - \sqrt{2}) \end{aligned}$$

よって右の増減表を得るので $h(k)$ が最小となる k の値は $\boxed{k = e^{-\sqrt{2}}}$

k	e^{-2}	\dots	$e^{-\sqrt{2}}$	\dots	1
$h'(k)$	-	-	0	+	+
$h(k)$			\searrow		\nearrow

【別解】 最小値を与える k の値だけ求めたいので積分を計算する必要は無い

- (1) のグラフより
 $0 \leq x \leq a$ のとき $e^{-x} \geq k \iff f(x) \geq g(x)$ ($x \geq 0$ より)
 $a \leq x \leq 2$ のとき $e^{-x} \leq k \iff f(x) \leq g(x)$ ($x \geq 0$ より)
 よって $H(a) = \int_0^2 |f(x) - g(x)| dx$ とおくと、

$$H(a) = \int_0^a (xe^{-x} - kx) dx + \int_a^2 (-xe^{-x} + kx) dx$$

$$= \int_0^a xe^{-x} dx - e^{-a} \int_0^a x dx + \int_a^2 xe^{-x} dx - e^{-a} \int_a^2 x dx$$

$$H'(a) = ae^{-a} + e^{-a} \int_0^a x dx - ae^{-a} + ae^{-a} + e^{-a} \int_a^2 x dx - ae^{-a}$$

$$= e^{-a} \left[\frac{x^2}{2} \right]_0^a + e^{-a} \left[\frac{x^2}{2} \right]_a^2$$

$$= (a^2 - 2)e^{-a}$$

$$= (a + \sqrt{2})(a - \sqrt{2})e^{-a}$$

よって右の増減表を得るので $H(a)$ が最小となる k の値は

$$a = \sqrt{2} \iff \boxed{k = e^{-\sqrt{2}}}$$

a	0	\dots	$\sqrt{2}$	\dots	2
$H'(a)$	-	-	0	+	+
$H(a)$			\searrow		\nearrow

'11 後期 理系 ④

p を自然数とする. 数列 $\{x_n\}$ を漸化式 $x_1 = \cos\left(\frac{2\pi}{p}\right) \cdots \textcircled{1}$, $x_{n+1} = 2(x_n)^2 - 1$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) $\cdots \textcircled{2}$ で定める.

(1) x_n を求めよ.

(2) l を自然数とする. $p = 2^l$ および $p = 3 \times 2^l$ のそれぞれの場合について $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n$ を求めよ.

(3) l を自然数とする. $p = 5 \times 2^l$ のとき, 数列 $\{x_n\}$ は発散することを示せ.

(1) 観察

$x_2 = 2 \cos^2 \frac{2\pi}{p} - 1 = \cos \frac{2^2\pi}{p}$, $x_3 = 2 \cos^2 \frac{2^2\pi}{p} - 1 = \cos \frac{2^3\pi}{p}$, \dots , $x_n = \cos \frac{2^n\pi}{p}$ と予想できる.

$\forall n (\in \mathbb{N}), x_n = \cos \frac{2^n\pi}{p} P(n)$ が成り立つことを示す.

(i) $(P(1) \text{ 左辺}) = x_1 = \cos \frac{2\pi}{p}$ ($\textcircled{1}$ より), $(P(1) \text{ 右辺}) = \cos \frac{2\pi}{p}$ より $P(1)$ は成り立つ.

(ii) $k (\in \mathbb{N})$ に対し, $P(k)$ を仮定して $P(k+1)$ を示す.

$$\begin{aligned} (P(k+1) \text{ 左辺}) &= x_{k+1} = 2(x_k)^2 - 1 \quad (\textcircled{2} \text{より}) \\ &= 2 \cos^2 \frac{2^k\pi}{p} - 1 \quad (\text{仮定 } P(k) \text{ より}) \\ &= \cos \frac{2^{k+1}\pi}{p} = (P(k+1) \text{ 右辺}) \end{aligned}$$

よって $P(k) \implies P(k+1)$ は成り立つ.

(i), (ii) より数学的帰納法により, $\forall n (\in \mathbb{N}), P(n)$ が示された.

(2) 思考

$\{x_n\}$ が収束する場合, その極限値を α とおくと $\textcircled{2}$ より $\alpha = 2\alpha^2 - 1 \iff \alpha = -\frac{1}{2}, 1$ なので, $x_n = -\frac{1}{2}, 1$ となる n を見つけてしまえば収束することが示せる.

(i) $p = 2^l$ ($l \in \mathbb{N}$) のとき, $x_n = \cos 2^{n-l}\pi$ なので, $x_{l+1} = \cos 2\pi = 1$ となる.

$\textcircled{2}$ より $x_{l+2} = 2 \cdot 1^2 - 1 = 1$ なので, 帰納的に以降の n に対し $x_n = 1$ となる. よって $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \boxed{1}$

(ii) $p = 3 \times 2^l$ ($l \in \mathbb{N}$) のとき, $x_n = \cos \frac{2^{n-l}\pi}{3}$ なので, $x_{l+1} = \cos \frac{2\pi}{3} = -\frac{1}{2}$ となる.

$\textcircled{2}$ より $x_{l+2} = 2\left(-\frac{1}{2}\right)^2 - 1 = -\frac{1}{2}$ なので, 帰納的に以降の n に対し $x_n = -\frac{1}{2}$ となる. よって $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \boxed{-\frac{1}{2}}$

(3) $p = 5 \times 2^l$ ($l \in \mathbb{N}$) のとき, $x_n = \cos \frac{2^{n-l}\pi}{5}$ なので,

$x_{l+1} = \cos \frac{2\pi}{5}$ ($= \alpha$ とおく), $x_{l+2} = \cos \frac{4\pi}{5}$ ($= \beta$ とおく), $x_{l+3} = \cos \frac{8\pi}{5} = \cos \frac{2\pi}{5} = \alpha$ となる.

これは $\textcircled{2}$ において, $x_n = \alpha$ のとき $x_{n+1} = \beta$, $x_n = \beta$ のとき $x_{n+1} = \alpha$

となることを意味しており, $\alpha \neq \beta$ なので,

帰納的に以降の n に対し x_n は異なる 2 つの値 α, β を繰り返す. よって $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n$ は発散する.

